

目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。私たちは皆ここにいる。」看守は、明かりを持って来させ、駆け込んで来て、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」そして、看守とその家族一同に主の言葉を語った。まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。（使徒 16:27～33）

パウロとシラスは「ローマ人である私たちが受け入れることも、行うことも許されない風習を宣伝しているのです」と訴えられ、鞭打たれ、投獄された。真夜中頃、二人は獄中で神への賛美と祈りを捧げていると、不安と恐怖にさいなまれている囚人たちは、こんな時、神への賛美を歌い、平安に祈ることができるものかと、二人に感動し、聞き入った。すると突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち、牢の戸が全て開き、囚人たちの鎖も外れてしまった。目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちは逃げてしまったと思い込んだ。職務が果たせなかった罪を問われることを恐れ、剣を抜いて自殺しようとした。パウロは大声で「自害してはいけない。私たちは皆ここにいる」と叫んだ。逃げ出せるのに逃げないで、牢に留まった二人の行為に看守は驚き、明かりを持って、駆け込んで来て、二人の前に震えながらひれ伏した。二人の神への賛美と祈りが囚人たちを脱獄させなかったと知り、大きな畏れをもって、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」と問うた。二人は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」と答えた。主イエスを信じれば、家族共々救われると、単純なメッセージを告げた。そして、看守とその家族に主の言葉を語った。看守は二人の鞭打ちの傷の手当てをし、彼も家族も皆、直ぐに洗礼を受けた。食事を出し、神を信じる者になったことを喜び合った。理不尽な投獄が契機になって、看守一家が主イエスの信者に導かれた。パウロの宣教は、苦難の闇の中から福音の光が差し込んでくるような宣教である。

翌日、高官たちは警吏を差し向けて「あの者どもを釈放せよ」と命じた。看守はパウロに「高官たちが、あなたがたを釈放するようにと、言ってよこしました。さあ、牢から出て、安心して行きなさい」と伝えた。パウロは警吏たちに「高官たちは、ローマ市民である私たちを、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打ったあげく投獄したのに、今ひそかに釈放しようとするのか。いや、それはいけない。高官たちが自分でここへ来て、私たちを連れ出すべきだ」と言った。警吏たちはパウロの言葉を高官たちに報告した。高官たちは、二人がローマの市民であることを聞いて恐れた。ローマ帝国において、ローマの市民権を持つ者だけが人間として扱われていて、ローマの市民権を持つ者への侮辱は許されないことであった。高官たちは牢に出向き、パウロたちに詫びを言い、牢から連れ出し、町から出て行くように頼んだ。牢を出た二人は、最初に洗礼を受けたリディアの家に行き、皆を励ましてから、次の町に向かった。フィリピ宣教で、リディア一家と看守一家が主イエスを信じ、洗礼を受けた。この人々がフィリピ教会の基礎を築いたのではないか。フィリピ教会はパウロを愛し、尊敬し、彼の宣教を力強く支える教会に成長している。